＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter
[No.8 2008/5/23]

宮川招聘教授の連続講演について
6月のオープンレクチャーについて
『HERSETEC』の刊行について
「テクスト布置解釈学原論」の要約
第8回オープンレクチャーの要約
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 宮川招聘教授の連続講演について

現在、グローバルCOE特任教授として名古屋大学に招聘されている宮川繁MIT教授による連続講演の日程と題目は下記の通りです。

第１回目
題目：「一致」（Agreement）
日時：6月3日（火）16:30–18:00
場所：文学部・文学研究科１階大会議室

第２回目（グローバルCOEオープンレクチャー）
題目：「画像文化」（Visualizing Culture）
日時：6月18日（水）18:00–19:00
場所：国際センター15FグローバルCOEオフィス

第３回目
題目：「文の構造」（Sentence Structure）
日時：7月1日（火）16:30–18:00
場所：文学部・文学研究科１階大会議室

第４回目
題目：「一致」（Agreement）

日時：7月8日（火）16:30–18:00
場所：文学部・文学研究科１階大会議室

使用言語：日本語

■ 6月のオープンレクチャーについて

上記の宮川教授連続講演第2回目をご覧ください。

■ 『HERSETEC』の刊行について

グローバルCOEプロジェクトの機関紙『HERSETEC』第1号（2008年3月）が刊行されました。欧文篇・和文篇の２篇からなり、和文篇には平成19年度gCOE論文賞受賞論文２編（阿部伸「批判のコンテクスト――エウリピデス『オレステス』におけるアポロン――」、小久保嘉紀「日本中世書札礼の成立の契機」）が掲載されています。希望者には文学研究科gCOE事務室で配布します。

■ 「テクスト布置解釈学原論」の要約

和崎春日「文化複合理解の人類学」（4月23日6〜7限）

儀礼テクストと複合社会との関係を考えた。メッセージの発信者のみならず、受信者も多い都市社会での儀礼テクストのあり方を考究した。そこで、都市社会の儀礼として、京都大文字五山送り火を取り上げた。まず発信者としての大文字保存会は、お盆の精霊送りの行事だと規定する。だが、都市には多様な住民が生活しており、その受け取り方は多様である。さらに、観光や信仰を目的とした旅人も、このときには何十万と押し寄せる。宗教儀礼性に充ちた送り火を観光旅行者は、綺麗な火として受け取る。点火の途端、ビルの屋上ビアホールで乾杯といった祝祭としての観賞姿勢もある。京都市交響楽団が大文字コンサートを行う。ガソリン大文字特価などという商業的便乗もでてくる。こうした現代的な祝祭的テクスト解釈もあれば、伝統的に行

事を受けとる人びともいる。大文字五山点火と同時に、花火を打ち上げる町内がある。盆踊りを踊る町内もある。獅子舞を踊る町内がある。ご詠歌をうたう町内がある。こうした受け取り方は、祝祭的から信仰的まで、グラデーションのように連続的で遷移的である。つまり、こうして、人びとは、市民も旅人もともに、儀礼を多様に受けとめて多様に解釈し、複合的な多様な自らの大文字行為を作り出している。こうして巨大な儀礼テクストの維持エネルギーが生み出される。複合社会の儀礼は、多様な参加層に多様に意味づけられて、各人に活かされて生き続けていくのである。

高橋亨「テクスト学と心的遠近法」（4月30日3〜4限）

はじめに「テクスト布置」の関係図式に基づいて、『源氏物語』というテクストをめぐる、パラテクストとしての〈紫式部〉、プレテクストとしての先行作品や注釈などのメタテクストについて総説する。次に、西洋のナラトロジーと『源氏物語』研究の立場からの「物語学」の共通性と差異について説き、「心的遠近法」理論の発想について説明を行う。具体的な教材として用いたのは、高橋亨『源氏物語の詩学—— かな物語の生成と心的遠近法』（名古屋大学出版会、2007年）の序章三「物語の〈文法〉と心的遠近法」と二「貴種流離譚と物語の話型」の第２節以降である。
平安朝の物語作品における語りの枠の動態の基本図式に基づいて、物語場の表現構造を捉えることができる。語り手と聞き手が「昔」や「今は昔」といった冒頭表現、また「けり」といった助動詞によって過去の物語世界内に同化して入り込み、また物語世界内を異化してそこから語りの現在へと回帰する。その原型として異界と現世とを境界領域を媒介にして往還する話形の図式があり、それはシャーマニズムの想像力の飛翔型と憑霊型の組み合わせへと遡る。「心的遠近法」とは、物のけのように作中人物の心内までも転移する『源氏物語』の語りの方法であり、それと共通する物語絵の文法としても一般化するための理論である。

阿部泰郎「宗教テクスト学の構築を目指して」（5月7日3〜4限）

宗教は、自らを構築する中核的な諸要素をすべからくテクストとして認知する志向を備えている。宗教は、聖典（聖なる書物）を己の拠とすべく創出し、イコン（聖なる図像）を介して豊かな世界像を示し、更にそれらは典礼

（聖なる儀式）の過程において機能する。宗教が創りあげるカテゴリーとは、それらを悉くテクストとして解釈するならば、その輪郭に限らず、生成と変容の様相までも記述できよう。宗教という文化は、それをテクストとして概念化する象眼の許で座標上に位置付けることが試みられてよい。とりわけ永い歴史をもつ日本における宗教の世界は、民俗宗教と普遍宗教との間で受容と葛藤を繰り返し、その過程で混融変容して、多様な展開を示しており、複雑な事象に満ちている。それらの事象を分節し、その布置を認識する方法としてのテクスト学という網目格子(マトリツクス)をもって解釈することが可能だろう。こうした問題意識をもって、さまざまな水準から日本の宗教について“読むこと”を試み、その解釈の響き合いの中で、共通する構造や一貫した法則を見いだす可能性について考察する。日本中世には、巨大な複合宗教テクストが形成されており、それらの所産は儀礼の場において、図像次元と文字次元、および儀礼化の位相と芸能（説話）化の位相に分節し、座標化される四象眼のなかに位置付けることができよう。日本の宗教テクストの豊かな世界を、この四座標象眼の仮説モデルに配してみるならば、そこに、一見限りなく変相する宗教事象を貫く“正中線”の如き座標軸を、もしくは仮想された軸線上に顕れる媒介的で典型となる宗教テクストにおいて見いだすことができよう。

■ 第8回オープンレクチャーの要約

2008年5月21日（水）18時〜19時
松澤和宏教授（文学研究科・仏文学）
題目：「ソシュールと解釈学」

ソシュールは記号論、および共時言語学の創始者としてもっぱら後世に名を残すことになったが、ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』は弟子たちによる改竄的編輯の所産であり、ソシュールの手による著作ではない。ソシュールの草稿と『一般言語学講義』との大きな相違の一つは、ソシュールが「共時的体系」をあらかじめ固定したものとは考えていなかったことである。例えばソシュールが「省略」という日常的な言語現象の裡に「価値の過剰」を看取していたことの裡にも十分に窺うことができる。しかし変動して止まない価値の体系が、その「恣意性」にもかかわらず相対的に安定しているのは何故であろうか。ソシュールは、不可視の伝統的時間の効

果をそこに見出している。歴史言語学が扱う日付の付された歴史的変化の時間とは異なって、言語を言語たらしめている時間は、社会的な伝達・流布に加えて世代から世代への伝承に内在する時間である。この伝統的時間の裡にこそ記号と言語体系の正当化の根拠があるとソシュールは考えた。言語のいかなる解釈も、この伝統的時間を暗黙の前提としているのであり、したがってこの時間は科学の一対象ではなく、科学の前提をなすものである。そこに「解釈学的循環」が顕在化し、演繹的な理論体系の成立不可能性が壁のように立ちはだかることになる。言語の一般理論に関する「書物」が1890年代に構想されたものの、数年後に結局断念・放棄された理由もそこにある。

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第5回ブリーフィング(2008/4/25)
西村善矢「中世初期イタリアの証書（カルタ）とその利用——テクストの内側と外側——」

中世初期イタリアで大量に産出された文字テクストの一つに、カルタ（charta）とよばれる証書、すなわち土地財産の権利移転にさいして作成された「私文書」がある。カロリング時代のカルタを特徴づけるのは、その形式が高度に構造化している点、そしてその契約類型が売却、贈与、交換、貸借とわずか４種類に限られる点である。定型的で種類の乏しい証書は、当時の人びとのさまざまな社会的、経済的要請にいかに応えることができたのであろうか。
羊皮紙に書かれた証書テクストの下には、定式化されたテクストの枠内では盛り込むことのできない情報を記すことがしばしばあった。このような、狭義の意味でのテクストの外側にある部分に注目することが、上記の文書利用をめぐる問題を解く手がかりの一つとなるように思われる。８世紀から11世紀の南トスカーナで作成された証書を素材として、テクストの内側と外側にあるものの関係を見極めること、それが今後の私の課題である。

■ GCOEスタッフ海外出張報告

グローバルCOEの研究・教育事業のために海外出張を行なった事業推進担当

者および研究員の報告書を逐次掲載していきます。

ゴーベル・ゼーン（gCOE事業推進担当・言語学）

出張報告 (調査旅行、2008年2月26日〜2008年3月25日)

まずは、先日の調査旅行に財政的援助を与えてくれたグローバルCOEプログラムに感謝したい。この調査では、オーストラリア、タウンズヴィルのジェイムズ・クック大学名誉教授で、インドネシア研究者であるバーンズ博士の元を訪れた。調査旅行の間、ピーター・バーンズ博士とは、植民地時代のインドネシアに於けるadat「習慣」というテーマと、それと民族性の構築との関係について議論を交わしたが、その中で、バーンズ博士は植民地法制のオランダの大学教授とインドネシア内に於ける民族集団の想定との関係を明らかにすることに成功した。特に、バーンズ博士が指摘したのは、20世紀初頭のライデン大学教授ファン・フォレンフォーフェンが、論争と当時の蘭領東インド(現インドネシア)に於ける民族集団の概念の強化に寄与したadat法の最終的な形成の中で如何に際立っていたかである。勿論、そこでの議論からは数多くの更なる疑問が生じたが、それらについては、このテーマについての共著論文のための考えを整理する予定の次回の訪問時に是非とも追及したい。議論と思索のための非常に生産的な時間であったことに加え、自著の第2章を書き終えたことも付言しておくべきであろう。またその間、HERSETECに於いて出版予定の論文の幾つかと、オランダに本拠を持つ雑誌Bijdragen tot de Tall, Land- en Volkenkunde (東南アジア・オセアニア人文学・社会科学会報), 164 (1): 69-101に掲載されたばかりの論文“Language, Class and Ethnicity in Indonesia (インドネシアの言語・階層・民族性)”の校正を行った。

小川正廣（gCOE事業推進担当・西洋古典学）

2008年3月21日から3月31日の旅程でマルタ共和国を訪問し、古代地中海文化の基層的研究のための調査を行なった。マルタはシチリア島とアフリカ大陸の間に浮かぶマルタ本島とゴゾ島からなる地中海南端の小国だが、世界的に比類のない先史時代の巨大神殿遺跡が多数存在する。それらは紀元前4000年から2500年にかけて建造されたもので、太古の石造建築物としてはエジプト古王国時代のピラミッドやブリテン島のストーンヘンジよりも古い時代層に

属する。今回の調査では、古代ギリシア・ローマの神話・宗教テクストの生成に潜在的な影響をおよぼした地中海先住民の宗教的基層と文明的様相を把握するため、おもに両島の巨石神殿と考古学博物館を訪れて資料収集と研究データの作成を行なった。
最初に赴いた本島東部のタルシーン神殿は紀元前3000年から2500年に建設され、マルタの神殿文明の最盛期に属する。保存状態も比較的良好であり、クローバー状に半円を重ねた三つの神殿コンプレックスの独特なプランがはっきりと残る。また明らかに大地母神と推定される巨大で豊満な女神像、螺旋文様の石製祭壇、動物犠牲の痕跡などによって、建築技術と芸術の発達とともに宗教文化の成熟をうかがわせる。一方、本島南部のハジャー・イム神殿とムナイドラ神殿も最盛期の遺跡であり、とくに前者には動物犠牲の詳細を示す石台、神託・占い用の部屋、男根崇拝のシンボルなどが残っていて宗教史的考察にとって貴重である。本島ではほかに、タ・ハージュラ神殿、アール・ダラム洞窟博物館、ビザンツ教会跡、ローマ浴場遺跡、ラバトの古代ローマ遺跡と考古学博物館、首都ヴァレッタの国立考古学博物館、国立図書館などで調査した。とりわけ国立考古学博物館では、マルタで出土した多数の大地母神像ほか各種の神殿遺物が系統的に整理・分類されて精緻な解説とともに展示されており、大変参考になった。
他方ゴゾ島では、マルタ最大の巨石神殿であるジャガンティーヤ神殿(紀元前3600〜3000年)が地中海最古の文明に属する建造物として屹立している。神像礼拝室と祭壇の複合的構築、生け贄洗浄のための石、蛇や螺旋文様などの装飾、大きな男根像などが、先史マルタ文明発展期の巨大なバイタリティーと高度な宗教システムの存在を圧倒的な迫力で示していると言える。ゴゾの遺跡と出土品についても、その中心都市ヴィクトリアの考古学博物館で詳細な学術的情報をえることができた。
歴史時代のマルタ島に関しては、古代ギリシア文化の痕跡はほとんどなく、フェニキア・カルタゴとローマの文明の影響が色濃く残っている(キケロの文献には当時のマルタに関する言及がある)。ところで、ホメロスの神話テクストに登場する英雄オデュッセウスが７年間留まった女神カリュプソの洞窟はじつはゴゾ島の北端にあると言われるので、今回の旅では期待して立ち寄ってみた。紺碧の地中海を真下に見おろす高い崖の上にうがたれたその洞穴は、なるほどそのような説が生じても不思議ではないじつに魅惑的な場所だった。だがホメロスの叙事詩では、あの洞窟付近の浜辺に立ってオデュッセウスが毎日７年もの間海を眺めていても、ギリシアの船は一艘も通り過ぎ

はしなかったという。孤島マルタはギリシア人にとって、神話的英雄オデュッセウス以外にはほとんど未知の世界に属していたのであろう。シチリア島にあれほど多くの植民都市を建設した海洋民族ギリシア人も、そのすぐ南に位置するマルタをあまりよく知らなかったのだ。この歴史的事実は、神話的なカリュプソの洞窟の存在そのものよりも不思議である。おそらく美しく魅力的なカリュプソとは、じつはマルタの先史文明社会において熱心に崇拝されたふくよかな大地母神を意味し、ギリシア人たちはその太古の女神についてのおぼろげな間接的知識をオデュッセウスの放流物語の中に取り入れたのであろう。このように神話テクストの具体的なエピソードが内包する歴史的コンテクストに関していささかの解明の手掛りをえることができたのも、今回の調査の一つの成果であった。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年6月中旬を予定しています。

・・・…━━━…・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.8
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・・・…━━━…・

---

gCOE_fellows mailing list
gCOE_fellows@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
http://svr.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/mailman/listinfo/gcoe_fellows